

木を知り尽くした家具づくり ～旭川家具の変遷とともに～

株式会社いさみや 代表取締役会長 関 口 浩 樹
URL <http://www.isam-net.co.jp>



■(株) いさみやは、どのような家具工場か?

(株)いさみやは、戦後の昭和25年に関口勇により創業されました。関口勇は、道庁の造営・第7師団の兵舎の造営の際に仙台から参加した関口伊三郎の次男です。昭和4年に札幌工業高校・木材工芸科を卒業し、国鉄旭川工場に勤務しました。当時は木造の客車の車体、ドア・窓などの建具、椅子などの家具の部門を担当していたそうです。その後支那事変に召集され、帰国後満鉄に転職し、昭和20年の終戦の時は北支河北省石門市の河北交通に籍を置き、昭和22年に引揚げてきました。帰国後は国鉄旭川工場で、国鉄マンとして働いておりましたが、ちょうどそのころ進駐軍から旭川の家具業界に、オーク材の事務用家具の発注があり、本家の関口木工を継いでいた長兄より、手伝って欲しいとの要請で国鉄を退職し家具製作の道に入ったそうです。

昭和25年独立創業、当時は和風の茶箪笥を作り、市内の小売店・問屋さんに卸しておりました。昭和29年に市内8条19丁目に移転し弟子も採用して少しずつ家具工場らしくなって参りました。私が高校受験のころ「後継ぎをやらないか」という誘いをうけました。家具工場の経営者になるのなら「木材の勉強」をさせて欲しい。その為には大学で木材の勉強をしたいと希望を訴えました。旭川東高校・岩手大学農学部林学科を卒業ということが実現したわけです。岩大4年の頃、そろそろ帰ってきて手伝えという要望がありましたが、林学科には、家具など木材加工に関する授業など全くなく、帰っても全然使い者にならないと自分で判断しました。そこで、さらに2年間家具を教える大学に行かせてほしいと訴え、千葉大学工業短期大学部・木材工芸科に編入学し、成田壽一郎先生に師事し、材料学・設計製図・木工機械・塗装・その他設備などの知識を身に着け昭和43年に当時の「いさみや木工有限会社」に帰任いたしました。工場は昭和39年に永山町3丁目に移転しており、1800坪の敷地に木造2階建て1000坪の工場、木材天然乾燥用土場、独身寮などが完備しておりました。

日本の家具業界は、高度経済成長の入り口のあたりで住宅新築に伴い家具の需要も増加の一途をたどり、生産設備の近代化の時期と重なり、千葉大で学んだこ

とが大いに役立ちました。昭和49年に現在地・永山北2条9丁目に工場新築。10,000坪を超す敷地に、鉄骨ブロック2階建て2800坪の工場製品倉庫・ボイラー・木材乾燥設備・木材倉庫などを完備した大型家具工場の誕生です。特にNCマシンの導入・UV塗装ライン・クリーンルーム導入による仕上げ塗装の無塵化を図り、製品の量産化とグレードアップを行いました。当時は和風の茶箪笥から、洋風のサイドボード・カップボード・両面ハッチなどに製品は変化し、作れば売れるというよき時代を過ごさせていただきました。

しかし、良いことは決して長続きしないもので、平成7年1月の阪神大震災の時、マスコミが「家具の下敷きになり死亡」「家具が倒れドアを塞いだので逃げられなく焼死」とか大騒ぎをした関係で、建築業界がそれなら「据え付け家具」にすれば家具の転倒は解決とばかりに、下駄箱・食器棚・書棚・サイドボード・収納箪笥などの箱物家具・棚物家具類を全て据え付け家具として住宅建設時に装備していました。これで婚礼家具メーカーは全滅し、現在は全国各産地には1社も存在しておりません。端的な例ですが、住宅をひっくり返して振ってみると家から落ちてくるものはベッド・応接セット・ダイニングセット等のいわゆる「脚物家具」だけです。顧客の求めている家具が完全に変わってしまったのです。

さらに平成5年に発生した「バブル景気の崩壊」も重なり、家具業界全体（製造・卸・小売り）が大きな打撃を受け大幅な縮小を余儀なくされました。家具産業の主流を占めていた「婚礼家具の箱物業界」、「食器戸棚・サイドボードの棚物家具業界」は、ほとんどが倒産・廃業・業種転換を余儀なくされ、「応接セット・ダイニングセットの脚物家具」が家具業界の主流になりました。

弊社もその流れには逆らうことが出来ず、平成7年には今までの「既製棚物家具路線」の廃止、生産量の半減化を打ち出し、新たに「オフィイス家具OEM受注」、「特注家具路線」へと大きく舵を切り、新たな顧客探しに全国を飛び回っていました。そのような中、オフィス家具大手2社とのOEM生産と、オフィス家具業界が全国の都道府県・市町村立の公

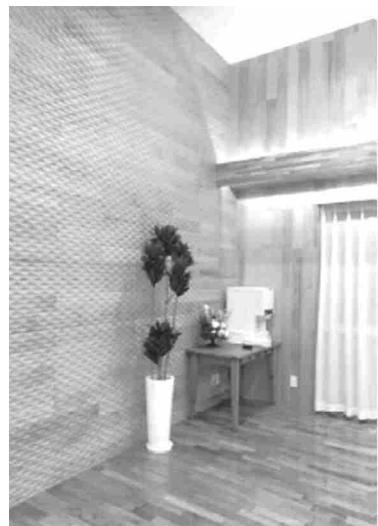
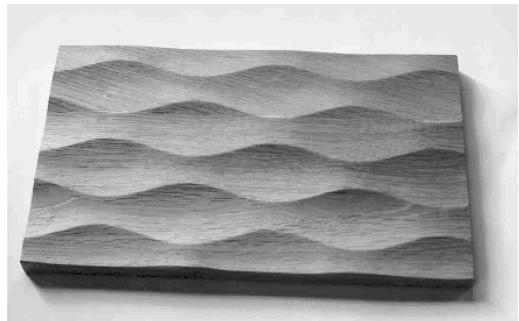


立図書館の木製書架・閲覧デスク・カウンターなどの特注家具の受注する物件などで息を吹き返すことが出来、今日に至っております。

平成22年社長を3代目関口洋平に譲り、会長就任。彼は、旭川東高校・東北大学理学部化学科・東北大学大学院修士課程修了という経歴の持ち主で、家具業界では珍しい経営者の一人と言えます。

その間に、古来、柄の曲がった手斧（ちょうな）ではつて加工していた「名栗加工」を、NCマシンで製作、縁あって沖縄市の病院の壁面に採用され、大量に製作・納品をさせていただきました。

また、旭川市より旭川家具工業協同組合に発注され



た「木製こども遊具」の製作にも参加し、フィール旭川のこどもクラブへ納品、毎年最高の利用者数を誇っております。このようなことで、木製子供遊具に関しては東京のデザイナー事務所「S&O DESIGN」と商品開発契約を行い、試作・ASAHIKAWA DESIGN WEEKでの発表・展示などで、好評をいただいております。絶対数が不足している「保育園」「幼稚園」の新設・改装の仕事も多く受注しております。その中に、木製こども遊具が設置される日も近いのではないかと期待をしております。



■木工の理念

私たちの身の回りにある多くの住宅や家具製品には木材が使われています。

木材は、昔から私たちの暮らしと馴染みが深い材料でした。化石燃料やコンクリート、化成品が登場してから徐々に使われなくなりました。しかし、最近では、地球温暖化の有効な緩和策の一つとして、再生可能な資源である木材の活用が改めて注目されています。かっての日本人は、住宅はもちろん、ほとんどすべての生活用品に木材を使用し、それらを利用して豊かな生活を送っていました。

しかし、戦後登場した石油由来の化成品（メラミン化粧版・木目印刷ポリ板等）は、多くの欠点を持った木材よりも合理的だという理由で、多くの日本人に好感をもって取りいれられ、木材の使用は非常に少くなりました。一方、政府も昭和30年に「木材資源利用合理化方策」が閣議決定されました。要するに、国を挙げて「木材をつかわないようにすること」が行政の大原則となつた訳です。

例えば、炭鉱の坑木は間伐材を使用せず鋼材を使用する。建築の足場丸太は鉄パイプを使用する。公的な建築物は木造より耐久性の高い鉄筋コンクリート造とする。橋は木橋から鋼材・コンクリートを使った永久橋にする。事務用家具は木製から合理的なスチール家具とする。燃料は薪炭類から石油燃料へ転換する。国

鉄車両も木製から鋼製化などが行われ、木材資源の消費制約が行われてきたわけです。

このようなことが重なって、日本には国土面積の約67%の森林があるにも係わらず木材の自給率は18%位で低く推移しており、伐期を迎えた森林から出る木材の適正な使用方法が政府で検討されました。平成20年に「森林林業基本法・基本計画・再生プラン」が決定され、今度は「どんどん木材を使え」という昭和30年とは真反対の法律が制定されました。10年後には木材の自給率を50%にせよとの号令も出されています。今度は公共建築物を木造の高層階造りにする。内装・事務用家具は木製にする。使用する木材はその地域で産出された「地域材」を使う。石油系の燃料をバイマス系の燃料に変える。道路のガードレールも鋼鉄製から木製に変えるなど。

しかしながら、60年以上木材から離れていた日本人は、自然の木材の良いところだけを望んでおり、木材にある多くの欠点を認めようとはしません。また、木材とはどういうものなのかという基本的なことを勉強せずに、好き勝手なことばかりを要求してきます。日本人に本当の木材の良さを教えるのは、木材業界・住宅建築業界・家具製造業界しかありません。私たち業界人は「なぜ木材の科学を学ばなければならぬのでしょうか?」「木」は、深くて、難しくて、手ごわい材料です。我々はそんな材料を「めしのタネ」にしているですから、仕事の場で様々な技術的疑問や問題点にぶつかるのは当然です。そんな時に木材の科学を勉強してきた人であれば、まず、持っている知識を総動員し、それでも不足であれば、新たな知識・情報を得たうえで科学的に解決を図ることになります。それでも問題点が解決できないことがあります。木材科学の分野でも、まだまだ未研究の分野が沢山残されています。

これから木工は、「木材の科学的な勉強」と「先人が残してくれた木材の癖」をよく理解し、消費者に納得のゆく説明が出来ることが求められます。また、それ以上の要求に対しては出来るものはできる、しかし、コストがかかりますと明確に説明することです。出来ない物は出来ないと、明確な理由を説明して引き下がることです。

■主力製品は何ですか？

(株)いさみやの現在の主力製品は、特注・受注生産の中でも量産志向の棚物家具です。例えば図書館の木製書架、キャレルデスク、カウンター類など、またオフィス家具類では、書棚、ロッカー、デスク、会議用テーブルなどです。

今後、時代の変化に応じた新たな商品が出現すれば、それを主力商品に出来るよう材料・設備・技術などの知識と設備を対応させることになります。

主力商品は、時代により大きく変化します。需要のあるものを製作するのがメーカーの務めであると考えております。



■こだわっている樹種はありますか？その樹種は入手しやすいですか？

現在の受注・特注家具の製作では、図面に指示されている樹種を使用することになっておりますので、自分の好きな樹種を勧めることはできません。

いくら好きな樹種があっても、商品の価格帯に合ったものか、産地は何处か、旭川で仕入れやすいか、乾燥は正確に仕上がっているか、木材におかしな癖はないか、など十二分に調査しなければ簡単に仕入れる訳には行きません。また、家具材としては、製材と突板が同時に仕入れられることが、大きな条件です。

従って、これらの条件を満たすものでなければ、採用にはなりません。

■針葉樹で家具を作ることは考えていますか

古来、日本の林業は針葉樹を主体としたものであり、家具についても針葉樹木工が主体でした。これが明治維新を迎え、建築の西欧化などにより横浜の元町、東京の芝辺りで洋家具の製作が始まり、広葉樹が多く使われるようになりました。これが広葉樹木工の始まりです。

針葉樹は、素材が軟らかく、強度が低く、樹脂が多く、節も多いため、昭和の家具木工にはほとんど使われてはおりませんでした。昭和45年~50年にかけて、道内のカラマツ間伐材の家具への応用ということで、旭川家具業界でも4~5社がカラマツ家具の開発に取り組みました。しかし、目の目を見ることなしに終わってしまいました。失敗の原因ですが、当時の乾燥技術では、樹脂の除去が出来なかったこと、カラマツの材の狂いの矯

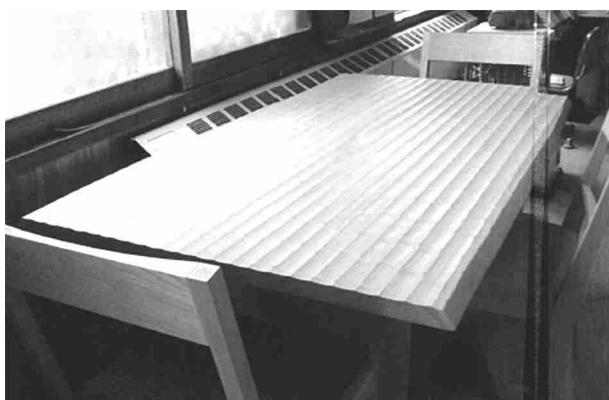
正できなかったこと、材が柔く接合部の強度が出なかつたことなどが上げられます。現在では、木材乾燥も高温のコアドライという方法が確立され、表面割れ、木口割れ、樹脂分の固化などが改善され、建築材・内装材としても十分な性能が出されております。

しかし、これらの針葉樹、特に地域材を使用してという条件が付き、図書館の特注家具の場合を考えてみると、まず、使用する樹種(地域材)を家具用に製材し、人工乾燥材を供給してくれる業者がいるかということなど、木材の仕入れに関する問題を解決しなければなりません。市販されている針葉樹材は全て建築用材であり、家具用材として使えるものはありません

(板厚・含水率・節など)。

ただし和歌山県の田辺市では、田辺市が経営し、紀州ヒノキ・杉の集成材・製材(床板・壁板・フリー板)などを加工する「田辺市中辺路木材加工場」運営しております。設計業者が指定する板・集成材を加工し、我々家具製造業者に提供してくれます。非常に珍しい自治体であると感心致しております。このような地域材専門業者が全国に増えてゆくと、非常に仕事がやりやすくなります。

これらの針葉樹(地域材)で製作可能な家具というと、箱物家具・棚物家具・テーブル類はなんとか可能と思われますが、脚物家具の食堂椅子類は強度的には無理です。これらの強度を満足させるには、圧密加工処理、圧密処理単板による成型合板加工などが必要ですが、これらの設備を完備した家具工場・合板工場は道内には無いのが現状です。



■林産試験場に望むこと

建築材・内装材の地域材化がすすむと、建築基準法・消防法など不燃・準不燃処理の問題に直面することになります。従来のような圧力釜の中で液状の不燃薬剤を加圧注入するのではなく、出来上がった床・腰板・据え付け家具などに塗装するだけで、充分な不燃性能を出せるだけの不燃薬剤を開発していただきたいと希

望しております。当然のことながら、室内空気質を汚染しないような物質を使用していただきたいと思っております。

また、針葉樹は広葉樹よりも多くの揮発性有機化合物(VOC)が含まれています。フィトンチッドと呼ばれている成分です。森林浴は樹木・木材から放散されるテルペニン類と呼ばれる α -ピネン、リモネンが人体に対するリラックス効果・リフレッシュ効果・消臭・脱臭効果・抗菌・防臭効果などが確認され、健康に良いとされています。しかし、これらの木材から放散された時には毒性はないのですが、紫外線・オゾンなどと反応して生成された分解物に毒性があるとされています。その分解物は、ホルムアルデヒド・アクロレン(アルデヒドの1種)・メタクロレン(アルデヒドの1種)・メチルビニルケトン(反応性の高い有機化合物で、人体に対する毒性が強い第一石油類に属す)などです。

WHOでは、テルペニン類のTVOCガイドラインを300 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ としていますが、日本では暫定値として400 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ としています。

「シックハウス対応とは自然素材である」というような風潮が広がる中、これは間違いですということを周知していただきたいことです。また、ホルムアルデヒドが成分に含まれていない天然オイルを使用したオイル塗装でも、オイルを木材に塗布した後、オイルの主成分である脂肪酸と空気中の酸素が酸化重合してオイルが硬化しますが、その反応時にホルムアルデヒドが発生します。その他にもアセトアルデヒド・プロパンアル(プロピオンアルデヒド；刺激性の強い臭気)・ヘキサナール(ヘキシリアルデヒド；吸入や皮膚からの吸収により健康被害が出る、目・皮膚・呼吸器など。強い刺激性あり)などのVOCの放散が見られます。このように、自然素材が全て安全・安心かというと、そうでないものが圧倒的に多いことになります。このようことは、木材の専門家である木材業界・建築業界・家具業界にたずさわる人々は、本来知らなければならないことです。知らないで顧客に間違った説明をしているようでは「その道のプロ」とはいえません。「木は呼吸している」「木は生きている」など、とんでもない「ウソ」を「本当」のように説明していることです。住宅の木材が呼吸するということは、家の中の酸素を吸って炭酸ガスを家中に放出していることになります。これが住人にとって素晴らしいことでしょうか?こんな説明をしている建築業界・家具業界は、木材の科学的な勉強をやり直さなければなりません。現在は、なんでも裁判の時代です。正しい知識を身に着けて商売をしないと、訴えられ裁判にかけられてしまいます。会社を潰すようなことにもなりかねません。